

# 小噺導入の実践報告

## —「演じる」効果を中心に—

中野二郎（拓殖大学 別科日本語教育課程）  
jnakano@takushoku-u.ac.jp

### 【要約】

本報告では、これまでに日本語教育に導入されてきた「小噺」、「落語観賞」等落語を教材とした授業に関する先行研究を概観し、各々の実践報告について特徴を整理した上で、筆者が行った授業実践について報告する。「小噺」を発表の授業に導入してきた経緯や目的、その具体的な方法について述べた後で、アンケート結果を報告する。「小噺」を通じて「演じる」ことを学ぶことによる口頭表現能力の向上や、伝統文化への関心の高まりについて論じる。最後に小噺を含む落語の教材としての将来性について展望を述べる。

### 1. はじめに

中野(2016)で報告したように、2013年の11月、国際交流基金ブダペスト日本文化センター主導で、ブダペスト、プラハ等中東欧各地では落語観賞会が開催された。その流れで、筆者が赴任したポーランド共和国クラクフ市でも落語観賞会、その前座としての日本語学習者の小噺発表会が開催された。小噺の指導については、発表までは日本語専門家として赴任していた筆者が行うことになり、落語については素人の教員が指導することに不安を覚えたが、プロの落語家の指導もあり、小噺発表は大盛況のうちに終わった。

筆者はそれまで音声の指導に関しては注意を払いながら授業を実践していたつもりであったが、小噺発表までの約1か月間という短い練習期間で学習者の発話能力に大きな進歩が見られたことは驚きであった。その理由としては、以下の点が挙げられる。

- ①繰り返し：同じフレーズを100回、200回と繰り返し練習したこと
- ②間の意識：“落ち”が正確に観客に届くようにポーズ（間）の意識化ができたこと
- ③フレージングの利用：イントネーションカーブ等視覚的に音の高低を意識しながら練習したこと
- ④明確なタスク：日本語で観客を笑わせること。強いモチベーションにつながった。

その学習効果を実感して、筆者は2016年に帰国後も筑波大学のCEGLOC（グローバルコミュニケーション教育センター）の「話す・聴く」、「演習」等の授業で教材として小噺の活用を続けてきた。本稿では先行研究で、小噺を用いた様々な授業実践を概観した後、筆者の実践を報告する。

### 2. 先行研究

これまで日本語の授業に落語を授業に取り入れた実践研究は数多く行われている。落語を題材とした授業の展開は大きく二種類に分類できる。まず、読解や聴解の題材としての落語である。この場合、

過程で背景知識等を学び、日本事情的な要素も含んだ知識の受容といった授業となることが多い。もう一方は、演じるコンテンツとしての落語である。さすがに数十分にわたる落語の演目を覚えるのは、非母語話者、母語話者を問わず時間的にも労力的にも負担が大きい為実践は難しい。しかし、畑佐他(2009)を発端とした「小噺」を演じるプロジェクトは各地で実践されている。小噺にはモノローグのものもあるが、これらの実践ではダイアログ形式のものを主に扱っている。それは、「演じる」ことで口頭表現能力の向上につながるといったビリーフに基づくものではないだろうか。

以下に、筆者が実践の際に参考にした先行研究と、その具体的な実践や方向性を概観する。

## 2. 1 土屋 (1993)

「時そば」という演目を聴解教材として扱っている。江戸時代の時刻や方位などの表し方など文化的な側面に触れ、聴解教材としてだけではなく、日本事情の紹介ともなっている。学習者の理解の為に江戸言葉の解説を交えつつも、学生への提示は音声のみである。学習スタイルが視覚情報に偏りがちな中国語母語話者の教材としている。この演目を選んだ理由として、①サゲの部分が地口(駄洒落)オチでないこと、特別な時代考証を必要としないことを挙げているが、筆者が授業で扱う小噺や観賞する演目を選定する際、この考え方を参考にした。

## 2. 2 畑佐・久保田 (2009)

「小噺を学生に演じさせるという発想を出発点にしている新しい試み」で、小噺というコンテンツを知識として知るのではなく、学習者に実演を促す実践研究の走りと言える。畑佐・久保田の功績は小噺発表会を始めたことのみならず、落語家や落語に精通した日本語教師がいなくてもこの活動ができる環境を整えたことである。筆者も小噺集や発表動画を活用して、学生たちのイメージ構築に役立てた。勿論自身なりの工夫も加えたが、スターターキットのように整った環境があったからこそ始めることができたと言える。

既存の小噺を発表するだけではなく、畑佐他(2009)にヒントを得て、筆者も小噺作りや母語のジョークの翻訳といった活動も行った。練習もなく一回きりの発表で意味を伝えるのは至難の業で、この活動には綿密な準備が必要であることを実感した。添削の際は、音声言語でより伝わりやすい語彙を選択したり日本とは文化的な背景が全く異なることが笑いに関係しているならば工夫を凝らしたりする等のプロセスが必要となる。

学生から得たコメントのうち印象的だったのは、「プロの落語家はすごいと思った」、「日本へ行ったら、寄席に行ってみたい」といったコメントである。勿論、学習者諸君が将来演者になって落語という文化を支えていく人材になることは可能性が低いと言わざるを得ないが、観客として落語という文化を支える側になってもらう素地作りには大いに貢献していると言える。

## 2. 3 有田 (2016)

主に中国からの学生13名が小噺発表をし、6名の学生にインタビューをしたという実践報告である。浴衣、お辞儀、正座、座布団、扇子、出囃子等の形式的な日本文化には、貴重な経験というポジティブな評価が見られる一方、有田は学生たちの感想を「日本語能力がこの経験によって大きく進歩した

と思わないが、緊張に耐えて大勢の前で初めて一人で外国語を話したので自信につながった」とまとめている。来日当時「日本語運用力はほぼ初級段階」との記述があるため、小唄の発表はかなり難しいタスクだったことが予想される。また中国本土からの学生ということで、文字中心学習スタイルに慣れている学習者であったことも想像され、小唄というコンテンツとの親和性もさほど高くなかったかもしれない。しかし、学習者が人前で日本語で発表して得た自信は、これ以降の日本語学習に大きく寄与したものと想像できる。

#### 2. 4 小熊 (2023)

ゲント大学での小唄を取り入れた体験型の授業について報告している。この実践は新型コロナウイルスの影響下にある時節だったため、オンラインで実施された。特筆すべきは小道具の使い方や小唄のきまりだけでなく、発音にも学習者の意識が向けられたことである。学生へのアンケート結果で見られたネガティブな意見として、「日本語の学習にはあまり役立たなかった」という意見があったが、筆者はこれを参考にし、授業での小唄の実践にあたって小唄を学ぶ意義、効果についてできる限り丁寧に説明し、授業で小唄を扱うことへのコンセンサスが得られるよう注力した。

学生からのアンケート結果には、自身が演じるだけでなく、「みんなの演技を見るのが楽しかった」、「ビデオを見るのが楽しかった」のように小唄を見る目が養われていることが垣間見えた。将来、落語という文化を担う未来の観客の育成にも貢献しているのではないかと思われた。

大相撲がモンゴルをはじめ、多くの国の力士を参入させることで世界中のファンを獲得したように、落語もコンテンツの普及により、日本語非母語話者のファンを獲得することは文化継承の為の一つの方策であると考えられる。

#### 2. 5 川口 (2012)

この論文は小唄にフォーカスを当てたものではないが、言語教育における「演じること」の効果、意義について述べている。川口が「俳優がうまく言えないというほとんどの問題は、実は台本の側にあるんですね」という平田 (2003) の言葉を紹介しているが、これは筆者が学習者に小唄発表の指導をする際に、大きなヒントとなった。小唄は、ただ既存のテキストを音声化するだけのタスクではない。台本が同じでも、演じる役者によって全く異なる世界を表現するように、小唄も自分なりの演じ方があるはずである。また、自分が使いやすい言い回しや語彙の選択も主体的に行っているのではないかという発想につながった。

小唄発表の難しい点は「短い」ことである。コンテキストのないその短い時間の中で、登場人物が何名いて、各々どんな性格の人なのか、話の舞台がどこなのか等説明のないままダイアログが始められる。姿勢、口調、表情、視線、イントネーションなどを総動員して初めて状況を伝えることができるのである。そういった意味で、台詞が「この人がこの状況でこんな言い方するか？」と疑問を持たれるものであってはならない。学生諸君には、台本はあくまでも台本にすぎず、自身でアレンジを加えるように指示している。セリフを自身で考えることで、「演じやすくなる」のである。何よりも、発表の準備段階で自身で試行錯誤することが一番学習になると感じた。

中野・上間 (2014) でも触れたが、落語に精通する友人に聞いた「自分の世界を作れ」という言葉を思い出した。今思えば、それは「自身で台詞をアレンジして、登場人物のキャラクター付けをして、

演じる」という意味であったのであろう。教師はそのためのサポートをすればいいというのが実践の基本的なスタンスとなった。

### 3. 授業の実践

以下に筆者が筑波大学 CEGLOC（グローバルコミュニケーション教育センター）にて 2019 年から 12 学期に渡って実施してきた小唄を用いた授業の実践について報告する。概要は以下のとおりである。

表 1 授業の概要

レベル	中級前期（但し、プレースメントテストでは発話能力をチェックしていない為ばらつきはある）。クラス名は「演習（seminar）」。
目的	日本の大学での授業に適応できるような口頭表現能力、発表能力の向上を目指す。
人数	15 名程度（但し、新型コロナ流行時は 3 名～5 名の時期もあった）
学習者の主な出身地域	西ヨーロッパ（ドイツ、フランス等）、東ヨーロッパ（ジョージア、ウクライナ等）、東アジア（台湾、韓国、中国）、中央アジア（ウズベキスタン、カザフスタン、キルギス等）
授業時間数	75 分授業×15 週

15 週のうち、小唄発表にかけた時間は 5 週程度（75 分×5 回）である。学生には 2 つの小唄発表がタスクとなっている。一つは筆者が作成して共有している『小唄集』から選択したもの、もう一つは自作（または自身で翻訳した）のものである。大部分の学生は、既存の小唄を日本語に翻訳してきたが、「笑い」というのは、その文化背景にかなり依存しているため、日本語母語話者の筆者には「何が面白いのやら…」と感じるものがあったり、小唄の状況そのものが想像しにくいものであったりしたため、「伝わる」ようにするための指導は時間と労力を要した。

#### 3・1 授業の流れ

実践した授業の流れを表で示す。

表 2 小唄授業の流れ

	授業内容
1 週目	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習者の既有知識を利用して、落語についてのブレインストーミング</li> <li>・動画視聴『Introduction to Rakugo 落語の基本』を視聴して、小道具（手ぬぐい、扇子）の使い方、上下（かみしも）、演じ方（侍、女性、子供等）を確認。</li> <li>・筆者が作成した「小唄集」配布。黙読の後、音読 → 自身が発表する演目を選択する。宿題として、次週までに小唄を作成（或いは、翻訳）してポータル上に提出するよう指示。</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・チェック事項を確認の上、グループ（3～4 名）内で口頭練習</li> <li>・チェック事項は以下の通り。</li> </ul>

2週目	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 上下（かみしも）ができているか</li> <li>② 視線の向き</li> <li>③ イントネーション</li> <li>④ オチがしっかり伝わっているか</li> <li>⑤ 役が演じられているか等</li> </ul> <p>3~4名の小グループ活動の為、さほど緊張せずに練習ができる。お互いにFBしていくうちに、学生間でチェック項目が浸透する。</p> <p>・教師は学生を一人一人呼んで、一週目の宿題（自作小噺、自国の小噺）のFB。 その地域ならではの背景知識が必要なものは避ける。 このレベルで難しすぎる語彙は避ける等指導</p>
3週目	<p>・前週に引き続き、チェック事項に注意しながら、グループ内で2つ（選択したもの、自作のもの）の小噺を口頭練習。</p> <p>・出囃子をかけて入退場、お辞儀の練習。</p> <p>前週の活動で学習者の目がかなり養われており、学習者同士のインタラクションが活発になる。「こうすれば、もっと通じやすい」「こうすれば、もっと面白くなる」等。</p>
4週目	<p>・発表</p> <p>※オンラインで視聴者を募る等観客動員に努めたが、平日午前という条件もあり、難しかった。聴衆はクラスメートと教師のみという状況が多かった。</p>
5週目	<p>・観賞会 前週に録画したクラス全員の小噺を観賞して、それぞれがコメントをする。その後、プロの落語家の落語を動画で一席観賞。</p> <p>最近の4学期は、三遊亭兼好師匠の『干物箱』という演目を観賞している。</p> <p>・ふりかえり（口頭で気付いた点など話す）</p> <p>・アンケート回収</p>

### 3. 2 小噺集の作成

先行研究2. 2でも触れたが、「みんなの小噺プロジェクト」等のサイトから筆者がピックアップして作成した。選定にあたって、考慮したのは以下の点である。

- ・「演じる」ために、モノローグよりもダイアローグ
- ・長すぎないこと。A→B→A→B→A→Bの6ターン程度を最長のものとする。
- ・オチがわかりやすいもの 見る側も大部分が日本語非母語話者であることに配慮
- ・地口（駄洒落のオチ）はできるだけ避ける。
- ・あまりに暴力的な話やセクシャルな話は避ける。

### 3. 3 「落語観賞」で見る演目

毎回頭を悩ませているのが、どの落語家さんのどの演目を見せるかという点である。土屋（1993）の述べたように時代背景の説明に時間がかかるものや駄洒落で落ちる噺は避けたいものの、何よりも学習者に楽しんでもらいたいと考えて、できるだけ笑える演目を選んだ。今回は三遊亭兼好師匠の「干物箱」を見せた。「吉原通い」や「花魁」等遊郭の事情、「湯」から当時のお風呂事情、典型的な「若旦那」とはどんなキャラづけがなされているか等若干の解説は必要になるが、時代や国を越えてもあ

る程度、「こんな人いるよね」、「本当に馬鹿な人だね」といったユニバーサルな世界観もあり、異世界の話としてではなく、自分たちと同じ“人”の話として親近感を持って見られると判断した。何よりも三遊亭兼好師匠の表情豊かでリズム感ある語り口を留学生たちに味わってもらいたいと考えた。

#### 4. 指導例

基本的な考え方は以下の通り。

- ・登場人物はどんな身分、性格の人で、今どんな精神状態か考える
- ・それに基づいて、セリフのカスタマイズをする
- ・具体的な視線やしぐさを考える
- ・効果的に「オチ」を伝える工夫を考える

では、具体的に行った指導を、例を挙げて紹介する。

##### (小噺1)

妻：ねえ、このあたしの作った肉じゃが、どうかしら？

夫：愛してるよ。

妻：料理の味のことよ。

夫：食べたから言ってるのさ。それでも、愛してるよ。

家庭料理の代表として「肉じゃが」が使われているが、学習者の中には、「肉じゃが」がどんな料理で日本の家庭でどんな位置づけなのかピン来ない人も多くいると思われるので、料理名は変更してもいいと伝えた。日本の家庭ではどんな料理を作っているのか調べて「カレーライス」、「味噌汁」にしてもよいし、母国の家庭料理が他の留学生にも認知度が高いものなら変更してもいいと伝えた。例えば、「水餃子」や「ボルシチ」等。

オチの前の「間」の取り方については例示のみ行った。例えば、「それでも」の後に、十分「間」をとり感情をこめて「愛してるよ」と言うパターンもあるだろうし、諦めた感じで「それでもあいしているよ」とそっけなく言うパターンもあるだろう。また、「面倒だ」というニュアンスで荒々しく言うパターンもあるかもしれない。教員からは選択肢のみ提示し、できる限り学生自身の判断に任せよう心掛けた。何しろ「演じる」のは学生自身なので、プロデュースも本人がした方がよりよいと考えた。

##### (小噺2)

A：よう、ミュラー。だいぶ変わったな。髪は白くなったし、髭も生えてる。それに太ってしまったな。

B：私はミュラーじゃないんですが…

A：名前も変わったのか！

ドイツ系と思われる「ミュラー」という名前はカスタマイズしてもいいと指導した。日本語を学習している立場であるから、「よう、鈴木」、「おい、ケンちゃん」等としてもよいし、自国の名前で「よう、李さん」とか「おい、ムスタファ」のように呼び掛けてもよい。

こちらが提示した小噺には、「髪」、「髭」、「太った」の3つの変化のみについて言及しているが、「眼

鏡」、「身長」、「鼻の高さ」、「毛量」等別の外見の変化を追加することも提案した。

オチの「名前も変わったのか」をどのように言うかも、選択肢を示した。Aが判断に要する時間、すなわち「間」を十分にとって、その結果合点がいった表情をしてから「あーっ！名前も変わったのか」というパターンもあるし、怪訝な表情で、「ん、名前も変わったのか」とボソツというパターンもあるだろう。

### (小唄3)

監督「さあ、この崖から飛び降りるんだ」

俳優「は、はい。でも、もしケガをしたり死んでしまったりしたらどうするんですか？」

監督「大丈夫。大丈夫。これが映画のラストシーンだから」

監督がどんなキャラクターなのか設定をさせた。無責任な感じで「大丈夫、大丈夫」と言うのか、或いは真面目に俳優に向き合って真摯に「大丈夫、大丈夫」と言うのか。またキーワードの「ラストシーン」をどのように効果的に聴衆に届けるかも考えさせた。無責任な口調で「ラストシーンだから」と軽く言ってもいいが、「映画の」の後ろにポーズを置いて「ラストシーンだから」を際立たせる手法もあると思われる。ポーズを置くことで、話者はキープフレーズを高いピッチで発話することが可能になり、聞き手はコンテキストを理解して次のフレーズを待つ態勢が整う。

以上のように、「小唄」は、ただテキストを音声化する作業ではなく、話芸でありパフォーマンスである。「演じる」ことでより学習効果が得られる。上記の小唄はいずれも文字数で60~70字程度で、演じる時間は10秒足らずであろう。しかし、短いからこそ、自身の中で状況設定をしっかりと場面を具体的にイメージしていなければ、聴衆に伝わりにくい小唄になってしまう。教員は演じ方を例示するなどヒントは与えるが、どう演じるかは学習者に委ねることで、この活動がより創造的なものになったと確信している。

## 5. アンケート結果

2023年度秋学期の受講生9名、2024年度春学期の受講生16名の合計25名に対してアンケートをとったので、その結果を紹介する。

質問Ⅰ 授業以前から落語に興味があったか (25名回答)

「非常にあった」は2名、「あった」は4名にすぎなかった。畑佐(2009)で言及しているように、「知名度は他の伝統芸能に比べて低い」ものの、落語をモチーフとした漫画やアニメの影響もあり、認知度は徐々に上がっているようである。

質問Ⅱ 小唄の授業を経て、落語に興味があったか (25名回答)

「非常に興味があった」が5名、「興味があった」が15名いて、ある程度授業が落語の知名度、文化理解の面で貢献したと思われる。

質問Ⅲ 小唄がスピーチ力向上につながったと思うか (複数回答可) (25名回答)

「大いに思う」が2名、「思う」が18名で80%の学習者がポジティブな評価をした。ポーズをコントロールしながら話す、イントネーションを状況に合わせて工夫する等のテクニックがマスターできたと感じたのが主な理由のようである。しかし、スピーチ力向上の項では16名もの学生が「人前で日本語を話す勇気がついた」にチェックを入れた。想定していた効果ではなかったが、有田（2016）で触れた「人前で話す自信につながった」というコメントは初級学習者だけではなく、中級学習者にも見られた。それだけ精神的なストレスになっていたことを知ると共に、このタスクを乗り切ったことで、今後の日本語での発表に堂々と臨めるようになっていけば、それはそれで意義と捉えたい。

#### 質問Ⅳ 落語家の何がすごいと感じたか（複数回答可）（25名回答）

16名の学生が「一人が多くの役を演じること」、12名が「表情の豊かさ」、8名の学生が「長い話を覚えていること」にチェックを入れた。自身が演じてみたことで、プロのすごさがより強く実感できたと思われる。「表情の豊かさ」については、三遊亭兼好師匠のコミカルな表情のなせるところであろう。

#### 質問Ⅴ 生の落語を見に行きたいか。（25名回答）

2名が「是非行きたい」、18名が「行きたい」と回答した。演者側か観客側かといえば、やはり観客側であろうが、授業で少しでも触れることで、落語という伝統文化を担う人が一人でも出てくれば、落語の国際化、そして発展につながると思われる。落語に限らず、日本で生まれた伝統文化だからといって、必ずしも日本語母語話者だけがそれを担う必要もなく、日本語母語話者だけが楽しめるものでもない。多くの人々が担う上で、日本語教育の場でこのような伝統文化が紹介されたり体験できたりすることは意義があると考えられる。

## 6. まとめ

2016年の国際交流基金が主催した東ヨーロッパでの落語口演を契機として、筆者は日本語教育における小唄の可能性を知り、畑佐による様々なサポート体制の構築（小唄集、実演動画）を活用しながら、実践を継続してきた。「会話能力とは何か」で口頭表現能力を伸ばす授業とはどんなものか行き詰っていた筆者にとっては、「渡りに舟」であり大いに「舟」に乗せてもらったが、僭越ながら自身もこれから小唄を活用してみようとする教師の「舟」の小さな一艘になるべくこの報告を書いた。

他にも小唄を日本語教育に用いた報告はあるが、筆者の実践中の特徴的な点は以下の二点に尽きると思われる。

### 1 音声化するだけでなく、「演じる」

演じるためには、状況やキャラクターを設定する必要がある。その想定に基づいて、しぐさ、視線、ポライトネス、イントネーション等を工夫する必要がある。学習者は日本語非母語話者ではあるが、自身の言語知識を総動員して、そのセリフがその場面に妥当かを考えざるを得ないのである。しっかりと練られたスクリプトならば、発表者自身も覚えやすく話しやすいであろう。それが、自身の言語活動にもよい効果を生むことを期待してのこの活動である。キャラクターが設定出来たら、どう演じるか考える。

### 2 落語という文化への招待

スポーツや楽器演奏なども同様だが、自身が少し体験することでその道のプロがいかに修練を積ん



で高い技術を身に付けているかが実感できる。つまり、見る目が養われる。落語も同様で、たとえ 10 秒程度の小噺でも落語の技法を用いて練習して発表することで、30 分、40 分の演目を演じるプロの落語家の“すごさ”が実感できる。また、学生諸君は恐らくこの授業での取り組みが最後になるかもしれないが、落語の面白さを知り、落語家のすごさを知った学習者が将来落語のファンになって文化を支える側になれば、落語の存続、繁栄という視点からも意義のあるものになると考える。

## 7. 今後に向けて

漫画、アニメ、アイドルといった所謂サブカル（現在の世界中での普及を見る限り、決して「サブ」ではないが…）と呼ばれる日本への入り口となりやすい分野と比較して、独特の様式を持つ伝統文化である「歌舞伎」、「能」、「相撲」等は日本語学習者には理解に時間がかかる印象がある。その伝統文化の一つである落語は「言語そのもの」であること、またかなり背景知識に依存する“笑い”に関わること等鑑みて、落語を楽しむ、落語を演じるなんて一部のエリート学生や変わり者の外国人が物好きでやることだという偏見があったように思う。

しかし、時代は移り、現在は桂三輝さん（カナダ人）、ダイアン吉日さん（イギリス人）、三遊亭好青年さん（スウェーデン）等演者にも多く非母語話者の活躍が見られ、『あかね噺』（馬上鷹将、集英社）、『昭和元禄落語心中』（雲田はるこ、講談社）等落語をモチーフとした漫画が人気を博し、アニメ化されて、若者世代にも落語への関心が芽生えてきたことを思わせる時代となった。長く続いているものには、それなりの理由があるはずだ。日本語教育界でも更にノウハウを積み上げ、教育側の環境を整え「とっつきにくさ」を排除していければ、将来強力な日本文化のコンテンツになり得るであろう。その結果、日本語学習者の学習がより楽しいものになり、人生を豊かで彩あるものになれば、これ以上の喜びはない。

## 参考文献

有田他 (2017) 初級日本語学習者が小噺を披露する

<https://one-taste.org/kobanashi/wp-content/themes/kobanashi/img/documents/Arita-2017.pdf>

(2025年1月20日)

小熊 (2021) 小噺を用いた日本語授業の実践と教師の内省

—ベルギーの大学におけるオンラインでの体験型学習—

<https://renrakukaigi.kenkenpa.net/ronbun/2021010.pdf> (2025年1月20日)

川口 (2012) 日本語教育における「演じる」ことの意味 —「文脈化」で学ぶ文法—

<https://pjp.f.princeton.edu/sites/g/files/toruqf1151/files/pdf/05%20Kawaguchi.pdf>

(2025年1月20日閲覧)

土屋 (1993) 「時そば」を聞く —落語を使用した授業例—

[https://drive.google.com/file/d/1W7hqvJsgQ0TyQh3v-APVh3EdlwUeve\\_k/view](https://drive.google.com/file/d/1W7hqvJsgQ0TyQh3v-APVh3EdlwUeve_k/view)

(2025年1月20日閲覧)

中野他 (2014) 小噺ワークショップ (ヨーロッパ日本語教師会 Newsletter 第51号)

<https://www.eaje.eu/media/0/myfiles/n151.pdf> (2025年1月31日)

中野 (2016) 機会創出の重要性 —小噺ワークショップで見られた学生の発音の向上—

<https://renrakukaigi.kenkenpa.net/ronbun/2016020.pdf> (2025年1月20日)

畑佐他 (2009) 一人で演じる日本語会話：小噺プロジェクトの実践報告

<https://pjp.f.princeton.edu/sites/g/files/toruqf1151/files/pdf/07-hatasa-kubota.pdf>

(2025年1月20日閲覧)

柳家さん喬 (2016) 日本語教育教材としての落語 —日本語教育のお手伝い— 『季刊 Ja-Net No69』

<https://www.3anet.co.jp/np/info-detail/98/> (2025年1月31日)

## 利用サイト

Introduction to Rakugo 落語の基本 (神田外語いしずゑ会)

<https://www.youtube.com/watch?v=XXDKhXZqT3s> (2025年1月20日)

三遊亭兼好「干物箱」【落語教育委員会】第二夜

<https://www.bing.com/videos/riverview/relatedvideo?&q=%e5%85%bc%e5%a5%bd%e3%80%80%e5%b9%b2%e7%89%a9%e7%ae%b1&&mid=36159F71B086CD3D570F36159F71B086CD3D570F&&FORM=VRDGAR>

(2025年1月20日)

みんなの小噺プロジェクト

<https://one-taste.org/kobanashi/> (2025年1月20日)